

帰依三宝のころ

津垣慶哉

帰依三宝の由来

浄土真宗はお念仏一つだということを聞かれています。聞かれますが、なぜ三帰依といふことを大切にされるのでしょうか。親鸞聖人が顕かにされた仏教は、三帰依から始まるといふことをまず押さえないといふ思います。

今から二千五百年前に仏教がインドで起こりました。お釈迦さまが三十五歳で覺りを得られたと伝えられています。緣起の法（道理）に目覺められたのです。一言で申し上げれば、私たちの身の回りに起こるあらゆることから、あるいは私自身についても因（原因）と縁（条件）と果（結果）によって成り立っているといふことです。考えてみたら特別に難しいことではないのですが、お釈迦さまがこのことを人類で初めて覺られたといふことです。

ところがですね、どんな立派な覺りを開いたとしても、それはお釈迦さま一人が真理に目覺めたといふ出来事にすぎない。それからお釈迦さまがどうなさったかといふと、このことを誰かに伝えても伝わらないだろうと、覺りを得られてから菩提樹の下でしばらく沈黙を守ってい

たのです。しかし「梵天勸請」から「初

転法輪」といひまして、覺りを得られて

から四十九日（または三十五日）という説があるのですが、その時はじめてお釈迦さまは後に弟子になる五人に伝えたといいふ出来事があつたのです。伝えられることによつて伝える教え（法）が生まれ、伝えることによつてお釈迦さまが仏といわれるお方になった。受け取つた人は僧と言われる。これをインドではサンガ（僧伽）と言つておりますが、五人の弟子が誕生したと。これが三帰依のもとになるものです。そして仏も僧の一員であります。

それからは教えを受け取つた人が次の人に伝えるという形で、仏教が伝わつていったのです。ですからお釈迦さまが三十五歳の時に覺りをえられたといふことを仏教のはじまりと考えると、「私も修行してお釈迦さまのようになろう」といふことになるのですが、浄土真宗はここが中心ではなくて、覺りの内容が他の人に伝えられた、ここが仏教のはじまりだといふことで、仏・法・僧の三つの宝に帰依するといふことが言われるようになったのです。

三帰依文の意味

三帰依文はどの宗派でも大切にされていますが、それぞれ少しずつ違ふようです。当派では三帰依の前後に文章を加えた三つの段落で構成されたものを拝読しています。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

といふ前段。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経藏に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して一切無碍ならん。

といふ中段。そして、

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇すること難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。という後段です。これらは、それぞれ別の經典から組み合わせたものなんです。前段は涅槃經（あるいは法句經）等に基づくとされます。また、中段は華嚴經、後段は開經偈と言われる偈文からの言葉なんです。この三帰依文は明治のころには東京帝国大学の仏教青年会で読まれていたそうですが、それが同朋会運動の中で取り入れられて、今日でも大事にされているんです。

意味を大まかに申し上げますと、前段は、受け難いこの身を受け、聞き難い教えに遇うことができた。今この救いにあずからないとふたたびこのようなチャンスは見通せない、そのような意味だと思えます。中段は、私は仏を尊び依り処として生きていこう。周りの人と共に仏道を体得しこの上ない生き方を願います。私は法を尊び依り処として生きていこう。周りの人と共に教えを深く学び深い智慧を得ることを願います。私は僧を尊び依り処として生きていこう。周りの人と共

に仏法に集う人びとと自在に生きることをお願います。そして後段は、この上ない深い仏陀の教えはどれほどの生を重ねても出遇うことは難しい。その教えを今私はいただいている。その教えを生きていこう。このような意味になると思うのです。

特に当派の三帰依文が他の三帰依文と違うところは、この三帰依文の中に「衆生とともに」という言葉が繰り返し出てくることです。私たちが念仏の教えに遇うというのは、私一人のことではなくて、「周りの人と共に」ということがある。そこに特徴があるんです。

お釈迦さまの仏典の中に阿難というお弟子との会話がでてきます。そこで阿難がお釈迦さまに尋ねるわけです。「自分は仏教を学んでいくにあたって、善き友をもつというのは大事な要素だと思うが、どう思われますか」と。お釈迦さまは「それは違う」と。「善き友を持つことが仏教のすべてだ」と強調されて応答される場面があるのです。仏教の目的というのは善き友を得ることがすべてだというくらい、大事なことなんです。報恩講で勤めるご和讃に、

他力の信心うるひとを
うやまいおおきによるこべば

すなわちわが親友ぞと
教主世尊はほめたまう
（『正像末和讃』）

『真宗聖典 第二版』六一七頁）とあります。仏法の信心を得た人をお釈迦さまは善き友だとほめてくださると。親鸞聖人の主著『教行信証』の最後のところに『安樂集』というお聖教が引用されています。

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え。

（『真宗聖典 第二版』四七六頁）

このように仏教が伝えられていくのだという事です。仏さまから教えをいただいた人は今度は次の人へ伝えていく。「訪う」という字ですが、亡くなった人を「弔う」という字も同じく「たずねる」という意味を持っています。身近な人を亡くした時、弔うというのは亡くなった方をたずねて仏法をいただいていくということなんです。

この『安樂集』の引用の次に引かれているのが、

『華嚴經』の偈に云うが如し、「若し、菩薩、種々の行を修行するを見て、善・不善の心を起こすこと有り

とも、菩薩、皆、撰取せん」と。

『真宗聖典 第二版』四七六頁

という一文です。『教行信証』はこの文で結ばれます。この部分だけ読んでもまったくわからないのですが、七高僧のお一人である源信僧都が説明してくださっているんです。それはこういう意味があるというものです。私が仏教の道を得た時はあなたが先に仏教の道を得た時はどうかわたしを導いてください。覚りにいたるまでお互いに師弟となりましょう。このような意味だということなんです。お互いに師であり弟子である、そういう関係を生きていこうと。まさに友ということはそのいうことではないでしょうか。この言葉によって『教行信証』が結ばれていくのです。

帰敬式を受ける

帰敬式を受けるということは帰依三宝を誓うということなんです。人間は老若男女とか尊いとか卑しいとか分けていくけれども、阿弥陀さまの教えをいただいたところから、すべての人が平等だという関係性が開かれていく。同朋という言葉もそうですね。教えに依る時に、周りの人たちを平等に見る見方が自分の中

に開かれてくる。そういうことが帰敬式を受ける一つの意味だと思います。

もう一つは、法名をいただき、仏さまの弟子になるということです。法名をいただくということは二度目の誕生ですね。仏教の中に生老病死という言葉がありますが、生の苦しみ、私たちがこの世に誕生する時に自分は何一つ選ぶことができない。名前も、親も、環境も、何も選ぶことができない。生まれてきて、気がついたらこの身を受けている。自分で選んでないから、「こんなはずではなかった」とか「生んでくれと頼んだ覚えはない」ということが出て、苦しんでいくということがあるのです。二度目の誕生で法名をいただいて仏弟子になっていくということは、本当にこの自分に生まれてきてよかったなという人生をいただき、終えていく人生を教えてもらうということが、その意味かと思うのです。

南無阿弥陀仏ということ

『教行信証』の最初と最後に、お念仏ということの大事なことが書かれてあります。『仏説観無量寿経』というお経に、インドのマガダ国のお妃である韋提希夫人が息子の阿闍世から危害を受け、夫である頻婆娑羅王が殺され、自分も殺され

そうになるという王舎城の物語が描かれています。韋提希はその状況に絶望してお釈迦さまに救いを求め、お釈迦さまが示したお念仏によって眼が開かれる、救われるということが語られるんです。親鸞聖人は、『教行信証』の冒頭にお念仏の教えが人の上に救いをもたらした最初の出来事として記しています。お念仏のはじまりといっているかもしれませんが、はじめて人の上にこの教えが救いをもたらしたと書かれているんです。それから『教行信証』の後序に、親鸞聖人御自身が、法然上人の教団が弾圧に遭ったということを記しています。そのところからこういう一文があります。

竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛なり。

『真宗聖典 第二版』四七二頁

お念仏の僧伽が力によって弾圧された。しかし、弾圧によって浄土の真宗はいよいよまちがいのない仏教であることが明らかになった。そのように親鸞聖人は受けとめられているんですね。

この二つのことをあわせて考えてみますと、韋提希の時は息子が反逆するという事件がきっかけとなってはじめてお念仏が人の上に救いをもたらしたと、お経

の中のこととして語られていますし、後序で述べられているのは、お念仏の教えに生きていた親鸞聖人や法然上人が力によつて弾圧されることによつていよいよこの教えが間違いない教えだということに確信をもつたと述べられています。

お念仏の教えは、私たちにとつて都合が悪い、思い通りにいかない、こんなはずではなかったという出来事がいよいよ念仏を求める縁となるということを、親鸞聖人はおっしゃっていると思います。

『教行信証』後序に「若し斯の書を見聞せん者、信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと」と示されていますが、疑謗によつていよいよ浄土が明らかになつてくるということを大切にしたいですね。

以上

津垣慶哉

一九五六年生まれ。九州教区田川組
正應寺住職、同朋会館教導